第２号

卒業あめでとう

今年も卒業の季節がめぐってきました。考古学コースにあがってきての 3 年間、大学院生はさらに 2 年間の勉学を積み、集大成としての卒論・修論をまとめあげました。指導してきた側としてもたいへん感慨深いものがあります。それとともに、発掘や報告書づくりなど、苦楽を共にしてきた仲間が去るのはとても淋しいことです。

今年は大学院生 2 人、学部生 10 人が巣立っていきます。修論・卒論のテーマとする時代は、縄文が 2 人、弥生が 1 人、古墳が 1 人、古代が 3 人、中世が 4 人、その他 1 人で、旧石器以外は広く各時代にわたります。3 年生の時に経験する「研究室旅行パンフレット作り」で担当した時代を、修論・卒論のテーマとして引き継いでいくパターンが今でも多いようです。また、分析する素材や方法は、石器の実験考古学、焼失住居、玉作工房、家形埴輪、瓦のクラスター分析、越前国府・郡衙、土師器焼成坑、立山信仰、越中の城郭、鳥取城の編年、史跡の活用状況などで、バラエティーに富んでいます。考古学の多様化とともに、卒論・修論のテーマもますます幅が広がっているようです。

原稿用紙数十枚もの文章を書くこと(なかには原稿用紙百枚を超える学生もいます)や、図版を作ることははじめてなので、よい勉強になったのではないかと思います。論文は長ければ良いというものではなく、要旨を簡潔にまとめることや、自分の主張を第三者に伝えることの難しさなどを痛感したことでしょう。また、各地の埋蔵文化財センターや博物館などを訪れ、多くの遺物を観察し、報告書を探索しても、研究成果として実らなかった努力がたくさんあることと思います。さらに、発掘調査担当者から直接話しを聞くなどして、一喜一憂することも多かったことでしょう。それがフィールド・ワークです。

最後に、他の専門コースではなかなか味わえないフィールドの経験が、深みのある人生に繋がっていけば、と願っています。　　(高橋 浩二)

目次

卒業おめでとう　高橋浩二

修士論文要旨

「北陸の古代土器生産の研究　－北陸東部の土師器焼成坑の分析を中心として－」
福沢佳典

「鳥取城における構造的変遷に関する研究　－石垣遺構の編年的研究を中心として－」
細田隆博

卒業論文要旨

「家形埴輪の研究　－スカシ孔に関する一考察－」
東　良明

「縄張りの構造分析に見る加越国境佐々系城郭」
伊藤剛士

「北陸における玉作工房の研究　－弥生時代後期を中心に－」
岡島怜子

「富山県内における遺跡の活用状況と地域住民のつながり　－「道の駅」におけるアンケート結果を考慮に入れて－」
久慈美咲

「中世立山信仰の研究」
黒木　甫

「数量的分析からみた古代北陸の軒丸瓦」
小林智海

「富山県朝日町境Ａ遺跡における磨製石斧の石材選択について　－石材調査と使用実験から－」
真田泰光

「土器組成から見る播磨国境地域の土器様相　－古代末～中世前期代の消費遺跡を対象に－」
徳井恵子

「縄文集落の焼失住居に関する一考察　－岩手県を中心として－」
村上しおり

「高森遺跡の性格についての再検討　－建物遺構を対象に－」
用田聖美

修論・卒論発表会と追いコンのお知らせ

編集後記

修士論文要旨

北陸の古代土器生産の研究

－北陸東部の土師器焼成坑の分析を中心として－

福沢佳典

本研究では、古代越中の古代土器生産体制がどのようなものであったのかを土師器生産の面から明らかにしたいと考えた。土師器焼成坑の分析では形態と規模に着目し、須恵器窯との立地関係から経営タイプを明らかにした。なお、形態分類では望月氏の研究成果を参考にした（望月 1997）。分析したのは県中心部の 11 遺跡であり、土師器焼成坑は 52 基である。

形態分類では全 11 遺跡 9 遺跡で土師器焼成坑形態の中で最も定型化された A 類が過半数を占める。中でも小杉流通業務団地内遺跡群№18A 遺跡は約 89％が A 類であり、さらに横長指向の A I 類が 78％である。隣接する№18B・C 遺跡でも横長指向 A I 類が半数以上を占め、8 世紀中葉の射水丘陵では横長指向型が主流であったことがわかる。8 世紀末～9 世紀前半の開ヶ丘ヤシキダ遺跡、9 世紀後半の開ヶ丘中遺跡においても A 類は主体である。しかし、同じ 9 世紀代の集落でも向野池遺跡では明確な土坑も持たず、被熱痕も弱い C 類のみで構成される。これらの違いは向野池遺跡のみが掘立柱建物群と土師器焼成坑で構成される点も集落の性格の差によるものと考えられる。

土師器焼成坑の規模では、密集し比較が容易な№18A 遺跡では 4 種の規模に分類できる。他の遺跡に関しては土師器焼成坑の分布が№18A 遺跡とは異なり用意に比較はできないが、№18A 遺跡で大型に分類した規模にまとまる。また、各遺跡ごとに近似した規模であり、集落ごとに規格はあったと考えられる。

以上から、越中では土師器焼成坑は 8 世紀中葉に小杉流通業務団地遺跡群内の№18A・B・C 遺跡に導入される。導入された場所が越中最大の生産地帯であり官的な性格も強い所であるのに加え、加賀において定型化され、最も古代土器生産体制の形を表す A 類に統一されており、集中的な生産がされる。ただし、9 世紀代では土師器焼成坑の経営形態にも二方向がみられ、須恵器生産・鉄生産が移動する開ヶ丘丘陵では A 類形態を引き継ぐ。しかし、平地に立地する向野池遺跡では不整形な C 類のみであり、土師器焼成坑の形態に対する規制はなくなる。

また、経営形態も導入期の 8 世紀中葉は須恵器窯の隣接し、土師器焼成坑が密集する様相を示すのに対し、9 世紀代は須恵器窯の小規模分散化に伴い土師器焼成坑も密集形態をとらなくなる。特に須恵器窯と離れて立地する。以上から導入期は基幹的な須恵器窯での須恵器・土師器の一体生産である「加賀型」であったが、9 世紀代に入ると須恵器生産と土師器生産が分離し、土師器生産のみが独立して行われるようにもなり、大枠として須恵器生産と土師器生産が分離する「越後型」に変化していったといえる。

最後に、7 年間もの長い間にわたって御指導をいただいた先生方及び諸先輩方、また富山大学考古学研究室にこの場を借りて深く御礼を申し上げます。

鳥取城における構造的変遷に関する研究
―石垣遺構の編年的研究を中心に―

細田隆博

慶長5年(1600)の関ヶ原合戦の後、多くの大名が新領地へ転封し、各地でその居城の築城を開始する。未だ大坂城には豊臣秀吉の遺児・秀頼が健全で、第2の関ヶ原合戦が起こりかねない状況の中での築城であった。それは豊臣氏が滅亡する元和元年(1615)まで継続する。従って、この15年間の前後は多くの大名が目まぐるしく列島内を移動し、その居城の増改築が繰り返された。

天正元年(1573)以降、因幡の中心であった鳥取城も同様な歴史的経緯を辿った城郭である。特に鳥取池田家成立以前、すなわち関ヶ原合戦を挟んだ天正期後半から寛永期前半にかけては、宮部父子、池田長吉父子、池田光政と次々と城主が交替し、鳥取城の構造が劇的に変化したと思われる。しかし、いずれの大名もやがて鳥取を離れ、この時期における鳥取城の構造的変遷は判然としない。

こうした状況の中、当該期の鳥取城とその城下の変遷を明らかにしようと果敢に挑んだ者がいた。江戸時代後期の鳥取藩士・岡嶋正義である。彼は後代の再検討を切に願いながら、自らの考察を展開する。すなわち、鳥取城は池田長吉の慶長改築によって北西から南東へ拡張整備され、現存する遺構の大部分がその時整備されたというものである。だが、彼の願いも虚しく、彼の説は無批判に多くの概説書に取り上げられ、あたかも通説化してしまった観がある。この主な要因は当該期の普請の様子を記す“一次史料”が確認できず、岡嶋氏以上の研究が不可能という“先入観”があるようだ。しかし、岡嶋氏の考察からおよそ180年を経た現在、城郭を取り巻く研究は考古学的視点を用いた研究の進展に伴って著しい進歩を遂げている。岡嶋氏が切に望んだ自説の再検討…。今こそ、その願いに応える時ではなかろうか。

鳥取城の場合であれば石垣が導入されるのは天正期後半以降であることは確実である。すなわち、現存する石垣という“一次資料”を検討することで鳥取城の構造的な変遷を述べることは可能となる。従って、本稿では、天正期後半から寛永期前半における鳥取城の石垣に対して考古学的手法を用いた編年研究を行ない、鳥取城の構造上の変遷を明らかにすることを目的とし、城下の変遷についても言及した。

具体的な分析の手法を説明する。本稿の目的である天正期後半から寛永期前半のオリジナルな石垣を検討するため、寛永期後半以降の石垣の特定が必要となる。そのため、従来17世紀後半頃以降、大型から小型なものへ転換していくとされている矢穴の法量を分析視点とした。その結果、鳥取城では、17世紀中頃から小型矢穴が使用される可能性を指摘でき、近世城郭としての鳥取城の完成期が寛永期前半であることが明らかになった。

本稿が目的とした石垣の編年研究では、従来の編年研究の成果を活用した。すなわち、考古学的研究法の根幹をなす型式学的方法と層位学的方法の応用である。また、各類型の指標石垣には実測図を作成し、全国の石垣研究の一助とした。その結果、天正期後半から寛永期前半における鳥取城の石垣は少なくとも3類型に分類でき、それぞれが特徴的な分布を示すことが判明した。そして、鳥取城は通説とは全く異なり、南東から北西へ拡張・整備されたことが明らかとなった。また、慶長改築以前、すなわち、豊臣大名期にかなりの規模で城郭の整備が行われたことが判明した。実に180年ぶりの新説である。

本研究は、鳥取城の通説を覆すという点で最も意義があるが、そればかりではない。例えば、従来難解

であった石垣の編年研究において、矢穴の分析が有効であることを明示した。また、研究対象とした鳥取城は地震などの被害で既に大半において修復が施されているが、修復前の実測図もしくは写真、再利用された石材の来歴さえ判れば、十分に石垣を考古資料として扱えることを本稿は実証している。今回の分析視点の提示とその実践は、同じように既に修復を終えた各地の城郭における石垣研究の参考になると思われる。

本稿の作成にあたって、黒崎直氏(富山大学人文学部教授)、高橋浩二氏(同助教授)には、特に細かくご指導ご助言頂きました。また、NPO 市民文化財ネットワーク鳥取と、上月騰氏(有限会社上月工業社長)、上月保道氏(同専務)ほか従業員のご高配で、平成 18 年 4 月から約半年間、鳥取城の石垣修復現場において実際の石積工事を体験させて頂くことができました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

卒業論文要旨

家形埴輪の研究―スカシ孔における一考察―　要旨

東　良明

古墳に樹立される埴輪はさまざまであるが、その中で最も重要であるとされる埴輪が家形埴輪である。家形埴輪は数ある形象埴輪の中でも最古に属する埴輪であり、埴輪の終末まで造られ続ける。従来の家形埴輪研究においては、後藤守一氏による研究を筆頭に、多くの研究者がさまざまな論を展開してきた。しかしながら、それは、主として家形埴輪とそれを取り巻く形象埴輪やその状況を包括しての研究が中心であり、円筒埴輪など他の埴輪と比較して家形埴輪自体の研究がなされていない感がある。そこで本論文では、家形埴輪そのものについて深く追求し、これまでの研究とは異なる角度からアプローチしてみたい。そこで注目したいのが、地面に埴輪を固定するための基部に穿孔された半円形のスカシ孔である。ここでは基部孔と呼称することとし、全国を対象に基部孔をもつ家形埴輪の集成を行った。なお、報告例は少ないものの、弥生時代後期に家形埴輪に先行して出現する家形土器は、家形埴輪に類似した形態をそなえているが、基部孔や、それと思われるスカシ孔等は一切見られないため、基部孔は家形埴輪として古墳に樹立される際に初めて穿孔を考えさせたものである可能性が高いことが指摘できる。

家形埴輪において、裾廻突帯よりも下は基部とされており、基部をもつ家形埴輪のほとんどの個体には、基壇を表したと考えられる裾廻突帯が貼り付けられている。裾廻突帯は 4 つに分類でき、以前から指摘されていた傾向が、基部孔をもつ家形埴輪においても指摘できた。

基部孔については、1）1 個体中における基部孔の数、2）基部孔が穿孔される位置、3）基部孔の形、4）基部孔の大きさ、の 4 点に着目して分類を行った。

1)、2）について、基部孔を 2 つ穿孔する例が多いように思われるが、必ずしもそうであるとは限らず、平側と妻側の数と穿孔される位置との組み合わせはさまざまであり、基本となる組み合わせはないように思われる。

3）に関しては i 類から v 類の 5 つの形に分類したものの、家形埴輪が出現する 4 世紀後半からさまざまな形の基部孔が出現している点は注目される。

4）については、6 世紀に入ると孔径が著しく小さくなり、1 つの画期といえるだろう。

これら 4 点に関してはある程度の特徴は捉える事ができたものの、それが何に起因するものかまで解明するには至らなかった。群馬県・赤堀茶臼山古墳や白石稲荷山古墳例のように、同じ地域や近い年代のものでも古墳ごとに異なる様相を呈しているものと思われる。

本論文では家形埴輪の基部孔についての謎を解明することに 1 つの重点を置いてきたが、孔の数・形や孔位置・孔径といった視点からそれを明確にできなかった点、分類において多分に主観が入ってしまった点に関して大いに反省すべきである。

また、本論の執筆にあたり、指導教官である黒崎直先生ならびに高橋浩二先生には数多くのご助言を賜り、また先輩方には数多の叱咤激励を頂いた。厚く御礼申し上げたい。

縄張りの構造分析に見る加越国境佐々系城郭

伊藤剛士

日本列島には、およそ 4 万ヶ所に及ぶ城館跡が存在するという。城館は様々な地形を利用して築かれたもので、それを必要とした要因もまた様々である。つまり「城館が如何なる形態を取っているか」が、築城主体やそれを取り巻いた社会からの要求に従ったものならば、遺された城館を通じて、築城主体やそれを取り巻いた社会を読み解くことが出来るだろう。

本稿では、天正期に越中国を治めた佐々成政が、越中・加賀両国の国境地帯において使用したとされる城について、要素ごとに数値化・分析し前田氏の使用したものとの比較検討を行った。複数の街道が走る加越国境において、両氏がどのような城を使用したのか。そして、佐々系城郭の意義とは何かを考えていきたい。分析で扱った城は佐々方のものが 12 城、前田方のものが 4 城、合わせて 16 城である。

各城郭の防禦性を検討するため、城を要素ごとに数値化して分析した。数値化した要素は城の「標高」、「比高」、「規模」、「郭の数」、「郭の面積」、「堀の数」の 6 つである。虎口や土塁については検出されない城郭があること。未検出の場合、元から存在していないのか、後世、自然的・人工的に消失したのか等を数値化するのは困難なため、今回は数値化するのは避けた。

まず、従来の城郭研究では織豊系城郭の特徴として、「地域性・個性を廃し、標準化・規格化された城郭」「同質の城を築く能力」などが挙げられている。

分析の結果、「標高」「規模」「郭面積」「堀の数」の項目において、天正年間に佐々方により大規模な改修を受けたとされる荒山城、一乗寺城、源氏ヶ峰城、松根城の四城が上位を占めた。特に「掘の数」の項目については、これら四城が飛び抜けている他は、佐々方の他の城郭や前田方の城は 5 前後であり、差が開くこととなった。また、これら四城は堀の数は 16~18 であり、ほぼ同等の値となった。

それぞれの数値化した値を合計したところ、荒山城、一乗寺城、源氏ヶ峰城、松根城の四城が飛び抜けている。また、これら四城の数値の合計はほぼ同等となっており、次に前田方の城、そして上記四城以外の佐々方の城という結果になった。それぞれの要素についても佐々方の大改修を受けたとされる四城は比較的上位に位置しており、佐々による改修の成果を窺わせるものである。また、今回扱った城郭の殆どが、周辺の街道との関係を指摘されていることも重要である。

数値化したポイントから読み取るに、佐々方の城は、天正期に大規模な改修を行った松根城をはじめとする四城と、それ以外の、既存のものをそのまま使用した比較的小規模なものとの二つに大別できるだろう。一方の前田方の城は佐々方の城郭と比べた場合、大規模な城郭とでは比べるべくもないが、小規模なグループの城郭と比べ同等以上の防御力を有すると考えられる。

現段階での結論としては、所謂佐々系城郭とは、天正期の加越国境地域において佐々方により大規模な改修を受け、或いは既存の城を利用したものであり、複数の城が其々同程度の防御力を有した均質化された城郭である。また、同時に街道との関係性が強い城郭であると考えられる。

最後になったが、卒業論文作成にあたり多大な御指導を頂いた黒崎先生・高橋先生、様々な助言を頂いた諸先輩・同輩方に厚くお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

北陸における玉作工房の研究　－弥生時代後期を中心に－

岡島怜子

本論では、玉作遺跡における玉作工房とそれ以外の建物(一般住居)において、床面積・平面形・特殊ピットの有無を比較し、玉作工房がもつ特殊性について検討した。

対象としたのは、弥生時代中期から古墳時代前期の北陸(新潟・富山・石川・福井)における玉作工房が検出した玉作遺跡である。玉作工房の定義については、各報告書によって異なるため、本論では玉作遺跡内の建物全てに対し、玉作関係遺物の出土状況を整理した。そして、製品・未製品・剥片という一連の玉作関係遺物が出土する、または２工程以上の未製品と剥片をもつ建物を玉作工房とし、それ以外の建物を一般住居として認定し直した。その結果、対象１２遺跡中３１棟を玉作工房として取り扱うことができた。

分析の結果、弥生時代中期における玉作工房の建物形態は、土坑を連ねたような周溝が巡る平地式建物が主流であることが分かった。しかし、この建物形態は弥生時代中期においては主体的なものであり、よって玉作工房は一般住居と構造的に未分化であったと考える。後期になると、一般住居では３９㎡以下の方形建物が主流であるのに対し、玉作工房は４０㎡以上の円形あるいは多角形の建物が多い傾向にあることが看守できた。古墳時代になると、方形４本主柱で壁際にピットをもつ建物形態が全国の玉作工房に共通して見られるようになる。また、時期を問わず玉作工房に特殊ピットが伴う割合が非常に高いことが分かった。

考察では、弥生時代後期における専業性の高い玉作工房に着目した。下老子笹川遺跡や林・藤島遺跡における専業性の高い工房は、円形で多主柱穴の建物形態であることが特徴である。弥生時代後期の北陸では、床面積平均 36.9 ㎡、方形４本主柱の建物が主流であるため、なぜ専業性の高い玉作工房に共通して上記のような建物形態が見られるのかについて検討した。円形で多主柱穴の建物は、山陰を中心に分布圏をもつ。また、京都府奈具岡遺跡の玉作工房においても認められる。下老子笹川遺跡、林・藤島遺跡、奈具岡遺跡は玉作工房に山陰系の建物形態を有すること、また管玉の法量も近似している。このことから、弥生時代後期の北陸における玉作は山陰・北部近畿の影響を強く受けていたと考えられる。玉作というのは、小手先だけの製作技術だけの伝播だけでなく、建物形態も含めた一体制として伝わっていたという可能性を考えたい。

弥生時代後期後半は山陰と北陸の日本海側沿岸地域で鉄器量が増加する時期にあたる。鉄製品やその素材は、玉類と交換することによって安定的に確保することができたという意見がある。また、鉄器が特定の玉作工房に集中している例もある。

以上のことから、玉作工房というのは作業場という存在のみではなく、首長の権力下に管理された建物ではなかろうか。専業性の高い工房において、山陰系の建物形態を専有させることに、権力の象徴的な意味をもたせたものと考えたい。

最後になりましたが、三年間御指導していただきました黒崎直先生、高橋浩二先生、また諸先輩方に心から御礼申し上げます。

富山県内における遺跡の活用状況と地域住民のつながり
～「道の駅」におけるアンケート結果を考慮に入れて～

久慈　美咲

富山県内には多くの遺跡が存在するが、今回は国・県・市町村指定された遺跡を対象にその活用状況と地域住民とのつながりがどのようになっているのかを調査した。遺跡の活用状況を調べるために標識や説明版、案内標識、休憩施設といった項目を設けその有無を調査した。国指定の史跡に関して、公開活用のための設備が整っており、史跡公園として活用されている遺跡が多い。また、越中五箇山のように観光地化している遺跡も存在する。県・市町村指定の史跡に関しては、史跡公園として活用されている遺跡が存在するが、その多くが標識や説明版しか設置されていない遺跡が多く、保存のみに留まっている。全体的に富山県内の遺跡は保存のみに留まり、公開・活用されている遺跡は少ない。また、史跡公園として公開・活用されている遺跡においても、その遺跡の周辺に住む地域住民の訪れは少なく、また、県外からの来訪者も少ない。富山県内の史跡公園は観光地や憩いの場というよりは小学生や中学生の学習の場として用いられている様相が窺われる。

地域住民と遺跡とのつながりに関して、西山丘陵一帯における遺跡(鴨城跡や城ヶ平横穴古墳等)は地域住民が核となって整備を進める計画が実行されている。これらの遺跡は多くの人が来訪するように整備されておらず、地域の活性化を第一に整備されており、地域住民と遺跡のつながりが色濃く出ている。その他の遺跡に関しては、調査が不十分であり論ずることが出来ず、多くの課題が残る部分となった。

遺跡の調査にあたり、今回は道路上にある案内標識がどのように設置されているのかを重点的に調べた。初めて遺跡を訪れる時は、地図を見ながら行くが、やはり案内標識に頼ることが多い。その案内標識が適切な場所に設置されているか、わかりやすく設置されているかによってその遺跡への来訪率が違うと思われる。

富山県内には「道の駅」が 13 箇所ある。「道の駅」は車に乗っている人の休憩場所や情報発信の場所である。その「道の駅」において遺跡に関するアンケート調査を実施した。質問内容は居住地・年齢・「道の駅」に訪れた理由やアンケート用紙に載っている遺跡を知っているかどうか、また訪れた事があるかどうか等を調査した。知っている・訪れた事があると答えた遺跡の多くがやはり、史跡公園として整備されている遺跡だった。また、「道の駅」から近い遺跡ならば訪れてみたいかという問いでは、「はい」と答える人が多かった。この事から、何かのついでに遺跡に訪れても良いという心理が窺われ、「道の駅」をはじめとして、多くの場所で情報発信を行う必要がある事が言える。

アンケート結果と遺跡の活用状況から言えることは、来訪者に対してその遺跡の情報を発信している場が少ないことが露に表れている。情報発信を的確にすることで多くの人が訪れる可能性があるように思われる。

中世立山信仰の研究

黒木　甫

本研究は、中世後期の 15 世紀～16 世紀の 200 年間が立山信仰の衰退期にあたるのかどうかを検証する為、立山山上における宗教活動の盛衰と、山麓における立山信仰の担い手となった里寺の盛衰の比較検討を行い、中世の立山信仰全体の中での位置付けを行うことが主旨である。この 15 世紀～16 世紀が立山信仰の衰退期にあたるという概念は、立山町教育委員会と富山大学人文学部考古学研究室が、1992 年に実施した立山山上の芦峅寺室堂遺跡発掘調査の成果と既存の立山信仰研究の成果を踏まえ、立山信仰の盛衰について時期区分を行った際のものである。これは現在も研究者達によって、山麓の遺跡を始め、他の山域である白山や医王山の盛衰を比較検討する際にも用いられている時代観である。しかしながら、1993～1997 年にかけて実施された立山山上石造物・関連遺跡調査によって、14 世紀～15 世紀代とされる多くの石造物が確認されたことを機に、筆者は 15 世紀が立山信仰の衰退期にあったかどうかについて疑問を持つに至った。そこで、今一度現在までの多くの考古資料と文献資料の研究成果を基礎に、山麓を含む立山全体の盛衰について検討した上で、立山信仰の時期区分及び中世立山信仰について再検討をすることの必要性を感じ、研究をするに至ったのである。山麓の里寺については、黒川遺跡群、大岩山日石寺、眼目山立山寺、立山七末寺を対象にした。盛衰の検討の際の資料である、文献資料、遺物や遺構の年代観やその特徴の検討に関しては既存の研究成果を基本的に採用するものの、複数の異なる見解がある場合や筆者が異なる意見・補足意見を持つ場合はこれに限らない。さらに必要に応じて、筆者が行った調査資料を加えた。

比較検討を行った結果、立山山上では、芦峅寺室堂遺跡を除く遺物量が 13 世紀から 16 世紀前葉まで平均的に存在したことや、14 世紀以降には在地の武家の関わりが考えられる石造物がみられることが分かった。山麓では、14 世紀後半に成立した眼目山立山寺が土肥氏の菩提寺となることで発展したことや、芦峅寺・岩峅寺が南北朝期以降、越中守護級の武家達と密接な関係を結びつく中で、十王信仰や姥尊信仰などの新たな信仰を確立し、寺社の復興や寺社同士の交流のあった状況が文献と遺物の検討から分かった。また、室町幕府の協力の下で、京都を中心とする各国の僧が立山禅定を行った文献資料が 15 世紀後半に多くみられることもこの時期の様子を物語っていえよう。以上のことから、筆者は 14 世紀中葉～16 世紀前葉は、立山信仰が鎌倉期の発展期を経て、武家階級を取り込むことでさらに発展した時期であると捉えるに至った。そして、その後の 16 世紀中葉～16 世紀後葉は、山上・山麓ともに遺物量が減少し、芦峅寺が在地の武家の支配下に置かれた状況が資料によって分かることから、上杉勢の脅威が立山山麓まで及び、それと並行して立山信仰が一時的に衰退した時期と考えた。結果として、従来の時期区分とは異なるものになったが、その理由としてこれまでの時期区分は芦峅寺室堂遺跡の遺物量を中心とした時期区分であった可能性を挙げたい。立山信仰全体の様相を掴むには、考古資料のみでは不足であり、文献や発掘資料以外の遺物も十分に活用することの必要性を今回の研究を通して考えた。

最後に、本論を作成するにあたって、多くの助言をして頂いた黒崎直先生、高橋浩二先生、上市町教育委員会事務局主事　三浦知徳氏、富山県「立山博物館」学芸員　福江充氏、富山県埋蔵文化財センターの久々忠義氏、富山大学人文学部日本史コース助教授　鈴木景二先生、諸先輩方、同輩に心よりお礼を申し上げます。

数量的分析からみた古代北陸の軒丸瓦

小林智海

北陸の軒丸瓦研究は、多くの研究者によって文様や製作技法から製作時期や系譜の研究がなされているが、未解明の資料や新資料の追加などにより軒丸瓦の研究は今もなお続けられている。そこで本研究では北陸と近江の軒丸瓦と少数の奈良の軒丸瓦を分析に使用し、北陸の軒丸瓦それぞれについての伝播ルートの解明を目的として分析を行った。

軒丸瓦の研究は様々な視点からなされているが、今回着目する点は瓦当文様である。瓦当径・中房径・蓮子数・弁形・弁数・弁長・外区文様・外縁幅・外縁文様の 9 つの要素に分けた。そして分析方法としてはクラスター分析という多変量解析の 1 つを使用する。クラスター分析とは異質なものの混ざり合っている対象の中で、互いに似たものを集めて集落（クラスター)をつくり、対象を分類しようという方法である。要するに、前述の 9 つの要素それぞれを数値化し、その数値を分析対象である軒丸瓦に当てはめていき、当てはめた数値を使いコンピュータによって複雑な計算を実行し、数値の似たもの同士を集めるという方法である。

分析結果はあらかじめ立てておいた仮説と比較すると、仮説通りにクラスターを形成した型式もあれば、仮説とはまったく違うクラスターを形成するものもあった。特によい結果として得られたものは紀寺式、山田寺式、川原寺式などの畿内に系譜をもち、文様としては特徴的なものが多い。反対に文様にあまり特徴のないもの、例えば外区・外縁に文様がないものなどはあまりよいクラスターを得ることが出来ず、今後要素を追加するなどの改善の余地はあるであろう。

分析結果から今までに解明されている系譜はもちろん、研究者によって意見が異なっていた系譜や新資料の系譜についても言及することができた。しかし、奈良・近江以外からの伝播の可能性を持つ型式もいくつかあり、扱う地域を拡大する必要性を感じた。さらにクラスター分析の有効性についても本研究で少なからず証明することが出来たのではないだろうか。

最後に、卒業論文を作成するにあたって、日ごろご指導いただいた黒崎直先生、高橋浩二先生、また、有益な助言をいただいた諸先輩方ならびに研究室の諸兄に厚く御礼申し上げます。

富山県朝日町境 A 遺跡における磨製石斧の石材選択について
―石材調査と使用実験から―

真田泰光

富山県朝日町境 A 遺跡からは磨製石斧完成品が 1031 点出土しており、そのうちの 90%以上にあたる 933 点が蛇紋岩製である。本論文では、このように磨製石斧の石材として蛇紋岩が選択されている理由を、石材調査と使用実験の面から検討した。

石材調査は、磨製石斧の原石として採集できる石材の種類別の比率を出し、その結果と境 A 遺跡における石材の使用比率を比較することで、素材の準備の際にどのような石材の選択が行われたかを分析するために行った。調査は富山県朝日町宮崎海岸で行い、対象とした石材は扁平な楕円形の円礫で、344 点の石材の種類を同定した。その結果、条件に合う礫が最も多い種類は安山岩（41%）で、次いで砂岩（18%）、蛇紋岩（14%）、玢岩（10%）となり、蛇紋岩が特に多いというわけではなく、境 A 遺跡における磨製石斧生産の際には積極的に蛇紋岩が選択され利用されていたということが明らかとなった。また逆に、4 割を占める安山岩が、境 A 遺跡出土の磨製石斧としては全体の 1%に満たず、磨製石斧の石材としては敬遠されていたといえる。

使用実験は、磨製石斧の素材としてどの石材が適しているか、またどのような点で適していると言えるのかを明らかにする目的で行った。実験に使用したのは蛇紋岩、安山岩、閃緑岩の 3 種類の石材で、実験内容は回数を設定して対象物に打ち付ける、ストローク実験である。使用した石斧柄は片手斧を想定した膝柄横斧で、対象とした木はスギである。耐久性や作業効率の変化は、主に実験中に生じた刃部の変化と、一定の作業の中で削れた木の量を比較することで調べた。その結果、石材によって耐久性に違いが生じ、蛇紋岩は使用による変化がほとんど生じず、終始安定して作業を行えるのに対し、安山岩や閃緑岩は作業を繰り返すことによって刃部に変化が生じ切れ味が悪くなり、作業効率が低下するという結果がでた。また、作業効率を低下させる要因としては、刃部の先端が摩耗によって磨り減り、刃部の角度が鈍くなることが最も影響していることが明らかとなった。

本論文では、従来言われていた通り、蛇紋岩が磨製石斧の石材として適した適性を持っているため、素材の採集の際に選択されていたということが、石材調査と使用実験から裏付けされた。さらに確証を得るためには、今回の実験では行わなかった砂岩などを用いた実験や、実験結果と実際の遺物とをつなげることなどの課題があげられるだろう。

最後に、本論文を作成するにあたって、多大なご指導を頂いた黒崎直先生、高橋浩二先生、愛知県教育委員会の原田幹氏、新潟県糸魚川市フォッサマグナミュージアムの学芸員の方々、小矢部市桜町石斧の会の方々、ならびに考古学研究室の先輩方・同輩・後輩に深く感謝申し上げます。

土器組成から見る摂播国境地域の土器様相
―古代末～中世前期代の消費遺跡を対象に―

徳井恵子

中世における土器は用途別に統合・簡略化が行われ、前代と比べると器種も少なく、装飾性のない、実用的な様相を示している。そのような簡素な土器様相をみせる中で、地域ごとに特色ある様相がみられることが、中世遺跡の発掘調査が進む今日、各地で成果が上げられている。今回、研究対象地と選別した摂播国境地域は現代における兵庫県神戸市にあたる地域である。当地域での土器研究は良好な資料に恵まれず、取り上げられる機会はあまりなかったが、近年、東播系須恵器諸窯の発見や中世遺跡の発掘調査などから多くの報告が行われてきた。そこで本論では、摂播国境地域の生産遺跡からの出土土器の組成分析を行い、当地における土器様相の一端を示すことを目的とした。

■土器組成分析からみる土器様相

当地は京都に近いこともあって京都系土師器や瓦器という畿内特有の土器がみられた。一方で、中世における一大流通圏を作り出した東播系須恵器の生産地が近接している影響の表れであろうか、他の畿内地域に比べて須恵器の割合が高くみられるという、当地域独自の土器様相を示し出された。また、遺跡ごとに組成の割合を比較すると、遺跡によって土師器・須恵器・瓦器の割合に差が見られた。

■建物群・遺構の違いと土器様相の関係

遺跡によって組成の割合に差異がみられたことより、遺跡の建物群・遺構の分類を加えて再分析を行った。その結果、大型の建物を要する遺跡においては土師器の割合が高く、中型・小型になるに従い、土師器の割合は少なくなり、須恵器の割合が多くみられた。

■出土した土師器の成形方法の違いについて

土師器の成形方法について、京都系土師器とよばれる手づくね成形による土師器と須恵器の技術を受容して出てきたロクロ成形の 2 種類があり、ロクロ成形土師器は当地域特有で、京都ではほとんど見られないものである。分析結果では、手づくね成形土師器が多くみられる遺跡とロクロ成形土師器が多くみられる遺跡とに分かれた。その区別は、建物規模や・地域などの共通点が、なくみられることから、各土師器の受容は、居住者の性格や属性によって選別された可能性があるといえるのではなだろうか推測した。

今回で、東播系須恵器窯と畿内の影響が色濃くみられるという摂播国境地域の土器様相の一端を示し出すことが出来たように思う。

最後になりましたが、黒崎・高橋両先生をはじめ、ご協力してくださいました多くの方々にお礼申し上げます。ありがとうございました。

縄文集落の焼失住居に関する一考察
―岩手県を中心に―

村上　しおり

岩手県一戸町に位置する御所野遺跡は、縄文時代の焼失住居を数多く検出したことで知られている。御所野遺跡の焼失住居は、その検出状況から意図的に火をかけられていた事が報告されている。筆者は、御所野遺跡を訪れ、当時の技術を総動員して築かれたはずの住居に、意図的に火を放つという、非効率的な行為がなぜ行なわれたのかに疑問を持った。そこで、岩手県の縄文集落に存在する焼失住居の性格を考察することをテーマに、調査を行なった。

焼失住居に関する研究は大別すると「竪穴住居の構造復原」「火災原因の解明」という二つの方向性がある。研究史を振り返ると、これまでの焼失住居研究は主に弥生時代～古代が中心であり、縄文時代の焼失住居は単なる失火や自然災害によるものと判断されがちであった。しかし、御所野遺跡の事例を踏まえた上で調査を進めると、失火・自然災害以外の火災原因の存在が明らかになってきた。

対象とした遺跡は、岩手県における縄文時代の集落遺跡 128 遺跡、竪穴住居 3,785 棟である。この中で、焼失住居の検出が報告されていた遺跡は、51 遺跡 199 棟であった。集成した焼失住居の時期的な増減が明らかとなり、縄文時代中期末葉～後期にかけて、その出現率が最も増加することが分かった。出現率に偏りが見られることからも、焼失住居が検出される背景には、単なる失火や自然災害という火災原因だけでは説明しきれない、他の火災原因が存在することが明らかとなった。この他、焼失住居の地域的な分布状況、平面形や規模、炉址の有無、遺物の出土状況などからも、焼失住居と非焼失住居とを比較して分析・考察を加えた。その結果、焼失住居に限定された特徴が見られる場合、「焼失している」ということ以外に、焼失住居と非焼失住居の属性に大きな差異が見られない場合など、多様な様相を示すことが分かった。

そこで、様々な様相を示す焼失住居を、「火災原因」という観点から分類することとした。火災原因は、「不慮の火災(自然現象・失火)」と「意図的な放火」に大別できる。意図的な放火は、さらに「住居廃棄に伴う放火」「廃村・移村に伴う放火」「死者に対する忌避的対処・葬送儀礼としての放火」と分類した。その上で、事例検証としてこれらの火災原因に、特徴的な遺跡を当てはめて考察した。

このように、本論では、岩手県における縄文時代の焼失住居の様相を明らかにすると共に、「住居を燃やす」という概念を共有する集団とそれ以外とに区別するといった様に、それまで同じ土器型式圏として一様に捉えられてきた集落の構成要員を焼失住居の存在から明らかにするなど、焼失住居研究の可能性を見出すことが出来た。

高森遺跡の性格についての再検討

－建物遺構を対象に－

用田　聖実

越前国府の所在に関しては、具体的な所在について発掘調査などによって明らかにされていないのが現状である。また、郡衙に関しても明確に所在が確認されている郡衙はなく、高森遺跡が丹生郡衙に推定されているのみである。そこで卒業論文では、高森遺跡が越前国府であった可能性がないのか再検討し、未だ推定でしかない越前国府の所在と高森遺跡の性格を明らかにすることを目的として考察することにした。

分析方法としては、掘立柱建物遺構の平面積規模、構造、遺構全体の建物配置の企画性などからアプローチすることとした。

まず高森遺跡の周辺地域の中での位置づけを確認するために、周辺の一般集落遺跡の建物遺構と比較検討した。その結果、高森遺跡が周辺の集落遺跡よりも建物面積規模が大きく、計画的造営を認めることができた。これにより高森遺跡が官衙的様相を呈するということが指摘できた。

次に高森遺跡の官衙的性格を検討するため、明確に性格がわかる全国の国府、郡衙遺跡と比較検討を行った。結果、高森遺跡の平面積規模や配置が、国府遺跡と同レベルとは認めがたい結果が導き出された。むしろ国府よりも郡衙遺跡との似通ったデータを示した。これらのことから、高森遺跡は国府の可能性よりも郡衙として機能していた可能性が非常に高いことが指摘できた。

以上、これらのことから高森遺跡の性格については、郡衙遺跡と考えられる。また、この周辺が丹生郡とされていたことから、丹生郡衙として機能していたのではないかと考えることが出来る。

しかし、今回の研究では建物遺構の規模に重点がおかれ、建物配置からの検討が不十分であった。また、より詳細に検討するためには、国府や郡衙遺跡だけではなく、他の官衙遺跡も含めた検討をすべきであった。

卒業論文の作成にあたっては、日頃から黒崎先生、高橋先生には多くのご助言を頂き、この場を借りて深く感謝申し上げます。また、資料を提供してくださった越前市教育委員会の斎藤秀一氏並びに、先輩方に深謝いたします。

平成 18 年度　富山大学考古学研究室　修士論文・卒業論文発表会
(第 10 回富山大学考古学談話会)

日時：平成 18 年 3 月 21 日 13:00～
場所：富山大学人文学部 6 番教室

当日のスケジュールは以下の通りです。お問い合わせなどありましたら 076-445-6195(富山大学考古学研究室)までご連絡ください。聴講は無料ですので皆様ふるってご参加ください。

【修士論文】

福沢佳典「北陸の古代土器生産の研究　－北陸東部の土師器焼成坑の分析を中心として－」

細田隆博「鳥取城における構造的変遷に関する研究　－石垣遺構の編年的研究を中心として－」

【卒業論文】

村上しおり「縄文集落の焼失住居に関する一考察　－岩手県を中心として－」

真田泰光「富山県朝日町境 A 遺跡における磨製石斧の石材選択について　－石材調査と使用実験から－」

岡島怜子「北陸における玉作工房の研究　－弥生時代後期を中心に－」

東　良明「家形埴輪の研究　－スカシ孔に関する一考察－」

用田聖美「高森遺跡の性格についての再検討　－建物遺構を対象に－」

小林智海「数量的分析からみた古代北陸の軒丸瓦」

徳井恵子「土器組成から見る播磨国境地域の土器様相　－古代末～中世前期代の消費遺跡を対象に－」

黒木　甫「中世立山信仰の研究」

伊藤剛士「縄張りの構造分析に見る加越国境佐々系城郭」

久慈美咲「富山県内における遺跡の活用状況と地域住民のつながり　－「道の駅」におけるアンケート結果を考慮に入れて－」

追い出しコンパのお知らせ

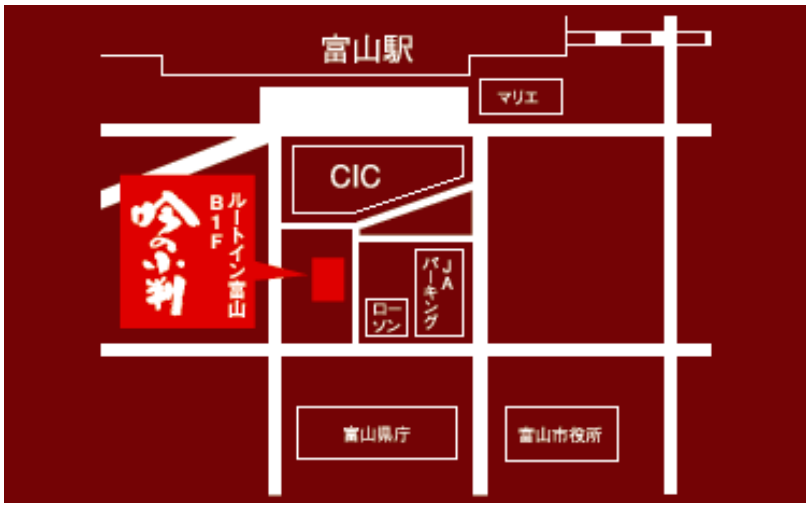
日増しに風が暖かくなり、春らしくなってきました。皆様いかがお過ごしでしょうか。

さて、富山大学考古学研究室では、3 月 21 日の修士論文・卒業論文発表会の後に追い出しコンパを行います。ご多忙中とは思いますが、参加していただければ幸いです。

日時：3 月 21 日 19:00～
場所：一次会･･･吟の小判 費用 4725 円
　　二次会･･･Big5 費用 3000 円

※費用は出席者の人数によって多少前後することがありますので、ご了承願います。

吟の小判地図



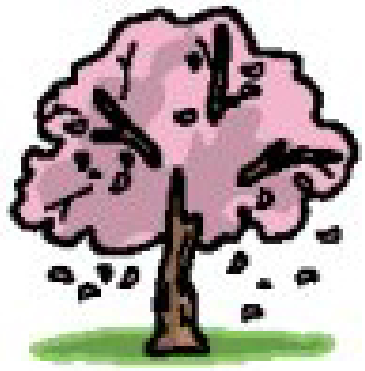
Big5 地図

編集後記

寒さもだんだんと緩んできた今日この頃ですが、皆様いかがお過ごしでしょうか。先日早くも桜の開花予想が出ましたが、今年は開花が 10 日以上も早いと聞いて驚いています。富山に春が訪れるのももうすぐですね。

春といえば、卒業される先輩方を見送り、新入生を迎え入れる季節です。嬉しくもあり、さみしくもある時期です。卒業される先輩方には、今回の富大考古通信に原稿を提供していただきありがとうございました。そして御卒業おめでとうございます。皆様のこれからの道がご多幸であることをお祈り申し上げます。

そして、春からは研究室に 3 人の新入生を迎え入れることとなりました。例年が大人数だったせいか少なく感じられます。2･3 年生の報告書作りも大詰めとなり、続く春からのパンフ作りで研究室が忙しない時期が続きますが、新入生とともにがんばっていきたいと思います。(坂上菜美子)



富大考古通信　第二号
配信日　2007 年 3 月 11 日
編集・配信　富山大学人文学部考古学研究室
住所　930-8555　富山市五福 3190
TEL　076-445-6195
留守番アクセス　4000　BOX 番号　6195
HP　http://www.geocities.jp/tomidaikouko/
メール　tomidaikouko@yahoo.co.jp

※メールつきましては、迷惑メールと区別するためタイトルに必ず「富山大学考古学研究室」と入力して下さい。ご協力よろしくお願いいたします。